

## 第 64 回岩手県水産審議会 会議録

日時 令和 7 年 2 月 12 日 (水) 13 : 30 ~ 15 : 00

場所 岩手県水産会館 5 階 大会議室

### 開会・成立確認

平嶋  
特命課長  
(進行)

定刻となりましたので、ただ今から、第 64 回岩手県水産審議会を開催いたします。事務局を担当しております、農林水産部水産振興課特命課長の平嶋でございます。暫時、司会を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

委員の皆様には、御多忙のところ御出席をいただき、誠にありがとうございます。本日は、委員 20 名のうち 13 名の御出席をいただいております。

半数以上の委員に御出席をいただきましたことから、岩手県附属機関条例第 6 条第 2 項の規定により、会議が成立しておりますことを、御報告いたします。

なお、北海学園大学経済学部教授の濱田武士委員、岩手大学農学部教授の袁春紅委員におかれましては、リモート出席となっております。

それでは、開会にあたりまして、岩手県農林水産部長の佐藤法之より、御挨拶を申し上げます。

### 挨拶

佐藤  
農林水産部長

第 64 回岩手県水産審議会の開催に当たり、御挨拶を申し上げます。

まずもって、皆様方には、岩手県水産審議会の委員就任に御快諾いただきまして、誠にありがとうございます。今回の委員改選におきまして、5 名の方に、新たに委員に就任いただいております。よろしくお願いいたします。

そして、本日は、大変お忙しい中、御出席をいただき、ありがとうございます。また、日頃から、本県水産業の振興に、御理解と御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、本県の主力である秋サケなどの極端な不漁が続いています。県では、水産関係団体と共に、「水産業リボン宣言」を行いまして、主要魚種の資源回復、増加している資源の有効利用、新たな漁業・養殖業の導入の 3 つの取組を、積極的に進めています。

今年度、サーモン養殖の生産実績は 2,000 トンを超え、ウニの蓄養は沿岸 15 地区に拡大するなど、取組が着実に拡大しています。

一方、加工原料の不足や水揚げされる魚種の変化などの課題もありますことから、先月、漁業、水産加工・流通等の関係団体が一堂に会し、目指す方向や今後の展開等を協議する、「いわて水産連携推進会議」を設立し、生産分野と流通・加工分野とが連携した取組を更に推進していきたいと考えています。

漁村の活性化や交流人口の拡大など、魅力あふれる漁村づくりに向けては、「海業」の推進に積極的に取り組んでおり、今年度から新たに、海業のビジネスモデルづくりの支援や、昨年 12 月には、知事出席の下「海業推進シンポジウム」の開催に取り組んだところです。

本日の審議会では、新たな漁業・養殖業や海業の取組、令和 7 年度水産関係予算案について、説明させていただくこととしています。限られた時間ではありますが、忌憚のない御意見・御提言をいただきますようお願い申し上げます。開会の御挨拶とさせていただきます。

本日はよろしくお願いいたします。

## 議事 会長及び副会長の選出について

平嶋 特命課長 (進行)	それでは、本日の議題に入ります。 第26期委員での初の審議会となりますので、岩手県附属機関条例第4条の規定に基づき、委員の互選により、会長及び副会長1名を置くこととされております。同条第3項の規定により、会長が議長を務めることとされておりますが、会長が決まるまでの間、慣例にならない、農林水産部長が仮の議長を務めることとさせていただきます。 佐藤部長、よろしくお願いします。
佐藤 農林水産部長	会長が決まるまでの間、暫時、仮の議長を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。 それでは、会長の選出につきまして、いかが致しましょうか。
佐々木淳 委員	会長は、山崎委員にお願いしてはいかがでしょうかと思います。
佐藤 農林水産部長	ただ今、会長に「山崎委員を」という御意見がございましたが、いかがでしょうか。
委員一同	異議なし。
佐藤 農林水産部長	それでは、異議がないようですので、会長は山崎委員に決定いたします。
佐藤 農林水産部長	それでは、会長の選出が終わりましたので、これで仮議長の務めを終えさせていただきます。 御協力ありがとうございました。
平嶋 特命課長 (進行)	それでは、この後の議事の進行につきましては、山崎会長が議長となります。 山崎会長、よろしくお願いいたします。
山崎 義広 委員 (会長)	岩手県漁業協同組合連合会の山崎でございます。 この度、会長の任にあたらせていただきますので、よろしくお願いします。 本日は、県から、「新たな漁業・養殖業の取組」や「海業」について説明があるようですので、今後の施策や事業を適切に進めていただくため、委員の皆様には、質問や意見など活発に御発言いただきますよう、よろしくお願いします。 それでは、議事を進めさせていただきます。 副会長の選出につきまして、いかが致しましょうか。
佐井 守 委員	副会長の選出は、会長に一任してはいかがでしょうか。
山崎 義広 委員 (会長)	ただ今、会長に一任という御意見がございましたが、いかがでしょうか。
委員一同	異議なし。
山崎 義広 委員 (会長)	それでは、異議がないようですので、副会長については、佐々木淳委員にお願いしたいと思います。

報告 新たな漁業・養殖業の取組（県産サーモン）について  
 海業の推進について  
 令和7年度水産関係予算（案）について

山崎 義広 委員（会長）	<p>それでは、議事を進めさせていただきます。</p> <p>今後の議事の進め方ですが、議題に関する資料1から資料3までの説明が全て終了した後、はじめに会場の委員から御質問等をいただき、次に、リモート出席の委員から御質問等をいただく流れとしたいと思います。</p>
藤原 振興担当課長	<p>それでは、議題（2）の、資料1の「新たな漁業・養殖業の取組（県産サーモン）について」、資料2の「海業の推進について」、資料3の「令和7年度水産関係予算案について」の順に、事務局から説明をお願いします。</p> <p>（資料1を説明）</p>
工藤 漁港漁村課総 括課長	<p>（資料2を説明）</p>
筒井 技術参事兼水 産振興課総括 課長	<p>（資料3を説明）</p>
工藤 漁港漁村課総 括課長	<p>（資料3を説明）</p>
山崎 義広 委員（会長）	<p>ただ今、事務局から説明がありましたが、ここからは議題（3）の意見交換とさせていただきます。</p> <p>資料1から資料3までについての質疑・意見、或いは、せっかくの機会ですので、出席委員の皆様から、それぞれのお立場でコメントをいただきたいと思います。</p> <p>なお、ご質問については、何名かずつに分けて委員の皆様からコメントをいただいた後に、事務局から回答させていただきます。</p> <p>それでは、会場の委員からですが、及川委員から佐井委員まで席順にお願いしたいと思います。</p>
及川 忍 委員	<p>漁青連では、藻場の再生を全県下で進めるため、講師を招いて研修会等を開催し、現在活動している事例や、先生の講義を聴き、研鑽していくこととしています。</p> <p>また、漁協の方でも、多面的機能発揮対策事業を活用した藻場再生等を行っています。現状、市役所職員や漁協職員等も人手不足等があり、事業が発揮できているか、活用できているかというところは少し疑問が残るところです。</p> <p>漁業者も、どうしても目先の収入が目減りしているため、藻場の再生で収入が増えると説明をしても、なかなか難しく、痛いほど気持ちはわかるので、そこは何とか一緒に活動していただけるように、まずは全県下でやれることから始めようということを進めています。</p> <p>今説明がありましたサーモン養殖について、越喜来漁協でも、来年度からサーモンの試験養殖を行うこととし、ニッスイ主体で始めることとしています。</p> <p>ただ、サーモン養殖については、ネットの記事等によりますと、マグロ養殖では、飼料の高騰等により、これらの生産をやめるとか中止するとか、そういう話も聞こえたりするので、サーモン養殖も餌の高騰等で、そういうことにならなければいいなと懸念し</p>

ています。ただ、これだけ商品も広がっているのです、今後、少し期待しながら、海洋環境への影響がないかどうか、漁業者の方でもしっかり監視しながら進めていきたいと思っています。

小野寺 真由美  
委員

現在、奥州市立水沢南小学校で学校給食の献立を立てております。

学校給食の献立は、児童の望ましい食習慣形成のために、生きた教材となるものとして、旬のものや地産地消のものを取り入れた献立を考えております。旬ということを考えて、秋には、サンマや秋鮭を昔は頻繁に出していましたが、今は漁獲量も減って、それに伴って、価格も高騰していて、安い給食費の中では、サンマやサケを使うことがあまりできず、それでも年に1回だけはどうしても出したいと思い、出しております。

沿岸部の小中学校の給食には、もっと頻繁に、サケ等を出しているようですが、内陸部では、魚というとサバばかりだねと言われている状況です。

それでも私は、県内のサケを出したいと思い、養殖のギンザケも給食に何回か出しているのですが、価格が高く、小学校の給食費1食300円のうち、養殖ギンザケ30グラムで113円(税抜)です。主菜の魚に3分の1以上お金がかかってしまうという状況で、これでは頻繁に出せません。例えば、生産量が増えたら、少し今より価格が落ちつくものでしょうか。及川委員から飼料が高くなっていると話がありましたが、生産量が増えても、今と同じような価格なのか。もう少し価格が下がると、使いやすいのが正直なところです。

また、サケの養殖について、学校で食育に使えるような資料等を作成して提供していただくと有難いです。子どもたちだけでなく保護者にもおたよりでお知らせしたいと思っていますので、よろしくお願いします。

桑野 直彦  
委員

普段は、県内の漁協や県漁連、東日本信漁連と連携して、最も身近な金融機関となるべく、金融の機能はもちろんのこと、販路拡大や担い手確保など、漁業者の経営相談的なところを果たしています。

ただ、近年の深刻な不漁であったり、海洋環境が変わってきて魚種も変わってきているということでありまして、県内の漁協も非常に苦しい経営状態になっているところで

先ほど及川委員から話がありましたが、やはり人口減少により、職員が減少しているということであって、なかなか漁業者に対して十分なサービスを果たしきれていないのかなというふうに頭を抱えています。

私は、岩手のほか宮城も担当しています。話のあった海面養殖、宮城でいうと陸上養殖であったりとか、新たな取り組みがやられているところではありますが、いずれにしろ、その魚のサイクルを待ってもどうもならないと。地球環境が変わってきているので、新たな事業に取り組まなければいけない。サーモン養殖をはじめ、新たなビジネスモデルに挑戦する漁業者の皆さんに対しては、信漁連等と連携してしっかり資金的なサポートをしていきたい。

また、海業の話もありましたが、漁協と連携した漁場環境保全活動やブルーカーボンクレジットの取り組み等もやっております。

漁業そのものも大事ですけど、それを維持・持続させるためには漁村の存在が欠かせないので、そこの取り組みについても、県の方からも説明がありましたが、そういう取り組みも支援していきたいなと思っております。

佐井 守  
委員

内水面漁連は、県内26ある川の漁協の連合会ということで動いております。内水面漁協の視点から、今抱えている問題とかお話できたらと思います。

沿岸部のサーモン養殖だったり、サクラマス生産だったり、水産振興として岩手県の方で取り組んでいるのは、何年も前から頑張っているなと感じており、結果も出ていると思います。非常に先進的な取り組みで、積極的にスピーディーに動いており、素晴らしいなとは思っています。

ただ、内水面は、かつて漁協組合員が1万人を超えましたが、今は4千3百人ぐらいに減りまして、26の漁協がありますけれども、半分ぐらいは、多分あと10年ぐらいで解

散するのではないかと危機的な状況に陥っています。

その主たる原因というのは、人口減少もあります。釣りに対するファンが少なくなったということや、魅力ある河川環境が少なくなったということだと思います。

沿岸の方の水産物の販売について、アルプス処理水、トリチウムだったり、それに対する取り組みが行われておりますが、内水面の川、岩手県の中心を流れる日本で4番目に大きい北上川水系でどういことが起きているかということ、今問題になっているネオニコチノイドの農薬だったり、フッ素化合物とか、そういうものが危険ということで、環境団体とか、保健福祉の方から出てきています。

また、気候変動もありまして、豪雨災害をはじめ、河川管理の部分で災害が多くなったことで、内水面漁協としては非常に活動し難い状況になっています。

海の水産振興はすごく力強いと感じていますが、内陸の川の施策はというと、少し心細いと感じておりますので、そういうところも全体として盛り上げていければと思っています。川の漁協として、何ができるのかということを考えているところです。

山崎 義広  
委員 (会長)

ただいま、委員から出された御意見等につきまして、事務局からコメントがありましたら簡潔にお願いします。

藤原  
振興担当課長

まず、及川委員からお話がありました藻場の対策ですが、先週も、及川委員も出席いただき、全県下での藻場対策ということで研修会を開催させていただいたところです。その際、県内の漁協青年部とか研究会の皆さんにお集まりいただき、参加いただいた方々が同じ目標、同じ方向を持って取り組んでいけるよう、引き続き、研修会等の取り組みを進めていきたいと考えています。

サーモン養殖のところで御意見をいただきました餌の高騰につきましては、国の事業で価格高騰分をある程度緩和するようにできる事業がありますので、そういった事業を活用していきます。また、湾内で養殖しますので、他の魚種との環境の問題もありますが、越喜来漁協では試験養殖ということで、環境の調査も合わせてやっていただきながら、大丈夫だということで、次期の漁業権の免許につなげていただければと思います。

小野寺委員の方から御指摘いただきました、サーモンの価格が高いということについては御指摘のとおりだと思います。一方で、秋サケがかつての100分の1以下になっていますので、非常に高い値段になっています。一方、ギンザケ等はこれまでゼロだったものが3千トンと、この先まだまだ伸びる余地がございます。そういった中で、少しでも県内の子供たちに馴染みもてる魚になるよう、増産の方も支援していきたいと思えます。

桑野委員からお話のありました新たなビジネスモデルについて、サケ、サンマ、スルメイカといった主要魚種が不漁になっておりますが、一方で、マイワシ、サワラ、タチウオ等といった魚が増えているので、県では、そのような魚をうまく活用した新たなモデル構築ができないかということで、令和5年度から事業を行い、来年度も引き続き、獲れる魚をしっかり使っていくというところで支援していきたい。

最後に、佐井委員からの御指摘のとおり内水面の漁協は厳しいところがあるのは承知しております。そういった中で、内水面の振興計画というのも県で定めておりまして、特に多面的機能という面で、内水面の漁協の活躍できるところはまだまだあると思いますので、引き続き、意見交換をさせていただきながら進めさせていただければと思います。

山崎 義広  
委員 (会長)

次に、佐々木委員から高橋委員まで席順にお願いしたいと思います。

佐々木 淳  
委員

先ほどの及川委員の御意見や県の返答に対抗するわけではないですが、水産審議会ということで審議していただきたいなと思います。

藻場の再生活動と一口に言っても、果たして人の力でどこまで可能なのか、また再生に至るまでどれだけ時間がかかるのかというのはわからない。それは、全国的に試みた結果からも一目瞭然で、岩手県では、親潮の接岸が繁茂の条件の殆ど満たしているの

はというのは、漁師は経験で感じている。

また、それに伴った潜水作業ですけれども、出来るところが限られることや、予算が課題という話を聞いております。最近の事例として、とても現実的で、どこの浜でも取り組みやすいという活動として、先日の藻場の会議の中で話がでた釜石東部漁協の両石湾の漁師が実験的に行っている取組として、養殖筏の表面で自然に溶けてなくなる生分解性の資材を使って、昆布などの種を巻き込み、オモリをつけて普通に養成する。これは、自分の浜でも実験的にやってみて、表面だとやはり天敵がいないので、すごく伸びるのは確認できていますので現実的だと思うし、オモリが付いているので潮の流れでも流されることがない。要するに、磯焼け漁場に、植えるのではなく、カツラを被せるみたいなイメージ。これが現実的かなと。これがあれば、漁師が誰でも取り組める、船があればやれるということで、取り組みやすく環境にもやさしいかなと思います。

ある程度場所を区画して、餌を求めて集まったウニ等を最後に漁協が出荷したり、そういう流れができるかなと、自然の生け簀のような感じで作れるのかなと思いました。

藻場の再生とは別ですけれども、飼料用として、母藻の養殖を続けているうちに、もしかしたら、親潮が接岸すれば、条件がそろって、天然の胞子とともに、どこかの磯場に付着し成長する可能性もあるのではないかなと思いますのでご検討願います。

そして、及川委員から話があったサーモン養殖というのはとても大切な話になるので、空き漁場があれば確かにやるべきだなと思いますが、学者から聞いた話で、魚の養殖をすると、貝毒プランクトンが増えるっていう、都市伝説みたいな話ですけれども、実際に科学的根拠があった話っていうのもありますので、それは少し怖いと思う。そこをしっかりと研究していただきたい。先ほど及川委員が言ったように、漁協の収益に繋がる、海面養殖っていうのは、どこでも増やすべきだなと思いますので検討をお願いしたい。

四戸 聡  
委員

今お話を聞いていて、水産業には様々な課題があると感じたところです。今回説明された、海面養殖であったり、海業であったり、いずれにしても水産業や漁村の持続性を高めるというような取組としては、非常に意味があると十分理解できました。

一方、課題として、漁場の問題とか、海業では地域の理解も相当大きな問題なのではないかなと思います。

そういった中で、いろいろな実証実験に取り組んでおられるというのは、非常に前向きな動きだろうと思いました。

普段内陸部にいる者からすると、やはり沿岸の海面養殖や海業といった取組が消費者としてはなかなか見えない、県の方で動画とかを流して紹介しているようであるが、なかなか見る人が限られると思いました。

先ほど海業のシンポジウムを開催されたという話もありましたけれども、広く見てもらうような工夫、いろんなオンラインの仕組みなどもありますので、現場が大事だというのはよくわかりますが、必ずしも沿岸に行かなくても、内陸の方でいろんな体験とか、聞くことができるような仕組みも少し強化していった方がいいのではないかなと思います。

特に漁業者との交流は、一般の消費者から見ても、非常に魅力があり、海業がまさにそうです。県内とか、近隣の県とか参加してみたいっていう人もたくさんいると思いますが、情報として伝わってきていないと思います。そういった意味で、漁業者と内陸の消費者が交流できるような、漁業者もかなり忙しいし、回数も限られると思いますが、若い漁業者がやりがいを持てる仕組みとして、消費者と交流できるような機会があれば、漁業や水産業に対する見方も深まるのではないかなと思います。

今回の予算を見ても、相当多額が投入されていると思いますので、県民に理解してもらうような発信を、是非、漁業者や行政含めて、取り組んでいただければと思います。

清水 勇吾  
委員

長年、海洋環境の研究をしているので、そういった観点からコメントをさせていただきたいと思います。

まず、海水温が上がってきている中、岩手県でも、サーモン養殖、海業、巻き網船が入るような漁港整備を進めているということで、これらの取組はすごく素晴らしいと思いますし、地球温暖化の適応策と合致していることだと思いました。

ただ、最近の2020年代からの水温上昇というのは、地球温暖化だけでなく、黒潮続流という、本来、千葉県沖をそのまま流れていたものが北に上がってきて岩手県の沖合まで流れて、それによって近年の海水面上昇が非常に顕著になっているのではないかと考えています。そういう状況ですので、数年後、もしかしたら、黒潮が通常の流路に戻って、その時は親潮が岩手県沿岸に接岸して、これまでのような秋サケが獲れないという状況も少しは改善されるのかもしれないと思います。海洋環境における水温上昇の仕組みというものをよく予測し、検討しながら、事業の推進を進めていかれたらいいと思います。

それから、それに関連しての質問ですが、定置網漁業も岩手県の重要な漁業だと思いますが、近年、黒潮が北上することで、例えば、急潮による漁業被害、定置網の破網など、どのくらい頻繁に起こっているのか教えていただきたいと思います。

高橋 篤  
委員

今回の水産審議会の開催にあたりまして、取引先数社に現状を聞き取りまして、共通する内容は1つで、県内の水産従事者が5千人を切っているのが重要ではないかということです。やはり、我々水産加工業の会社に関しては、岩手で作られる水産物というのが生命線になっており、ここ数年、減産による価格高騰等により、ここ数年の収入に関しては横ばいみたいな感じのところもありますが、サケとかをメインにしていたところは明らかに収入の減少が続いています。水産従事者にとって、ある程度の所得向上と、将来に夢と希望をもって就業する形を作っておかないと、「水産アカデミー」を受講し学校をでたけれど、収入少なくてどうなのかというところも現実問題あると思います。ただ、そういったことに関しての予算は対象になるものがほとんどないとしても、そこは本日ご参加の皆さんの知恵を絞って、水産従事者が収入確保できるようなことができないものかと思います。

それと、前回資料でいただいた水産リポーン宣言の取り組みの進行状況や、新しい取組も参考にしながら、現状回復して、魅力ある水産業をつくらせていただきたいと思います。

山崎 義広  
委員（会長）

ただいま、委員から出された御意見等につきまして、事務局からコメントがありましたらお願いします。

藤原  
振興担当課長

佐々木委員から話のありました藻場の関係でございます。

先日の研修会の事例紹介として、本日御紹介いただいた釜石東部漁協の話もいただきました。磯焼けと一言で言いますが各地区で状況が違い、最適化という意味でも、それぞれ異なるかなというのが、先日の研修会での意見でした。そういった中で、先ずウニを獲るとというのが共通のやり方ではありますが、委員から御紹介いただいた餌の方を供給するということも、ウニの密度管理と合わせて重要な取り組みだと思います。そういった取組も協議できるような研修会等を今後も開催していきたいと考えております。

サーモン養殖を行っているところは、漁場改善計画を作成し、漁場の環境にも注意しながら養殖を行っております。そういった漁場環境もモニタリングしながら養殖生産を頑張らせていただくという考え方で、今後も進めていければと思います。

神  
水産技術セン  
ター所長

佐々木委員からお話がございました藻場の再生についてですが、ウニの徹底採捕、それから、藻場の再生の取り組みということで、当センターでは、コンブの半フリー種苗等を使って、コンブの再生に係る基礎データを収集しているところです。

もう1つ、魚の養殖をしているところでは貝毒プランクトンが増えるという都市伝説的な話ですが、そのような話は聞いたことがなく、主な原因プランクトンである麻痺性貝毒プランクトンですが、通常は、春から夏に増殖する、それから、夏から秋・冬にかけて増殖しますが、それらが今連続して出ている感じです。魚の養殖とは直接関係はないというふうに見ておりますし、むしろ、水温の影響が大きいかと思います。

他、生分解資材の活用ということでのお話もございました。詳しくは承知しておりますけれども、環境にもやさしいということですので、そういった活用もあるかと思

<p>工藤 漁港漁村課総 括課長</p>	<p>ます。母藻を使った養殖、これは大変いいことだと思いますし、母藻の養殖を続けているうちに親潮が接岸するのを待つなど、藻場の再生につながると思います。</p> <p>様々、私どもの研究したものについては、その都度、現場展開しておりますし、先日勉強会等もございましたが、漁協ごとに出前講座というものをやっておりますので、そういうものを御活用いただければと思います。</p> <p>四戸委員からお話のありました、海業を進めるに当たって地域の理解が必要だろうということで、そのとおりに思っております。今年度は、沿岸12市町村それぞれで、市町村や漁協との意見交換等も行っております。</p> <p>桑野委員からもお話がありましたけれども、漁協の方でも新たな取り組みをするといふとなかなか難しいというお話もありまして、そういった意見を聞きながら何ができるのかというところは考えていかなければならないと思っております。</p> <p>また、周知の場がもっと必要ではないかという御意見もいただきまして、今回、海業に取り組む側に視点をおいてシンポジウムを開催したわけですが、今後は、内陸部に向けても、海業の取り組みに是非参加していただく形で広く周知をしていかなければならないと思っておりますので、来年度以降のシンポジウム等の参考にさせていただきたいと思っております。</p>
<p>野澤 漁業調整課長</p>	<p>清水委員から質問のありました急潮についてですが、急潮は委員から説明のあったとおり黒潮続流の北上が影響しているということで、本県の場合、令和5年度頃から被害が出ておりまして、9月15日に急潮被害ということで、定置網6箇統で2億5千万円、12月2日、急潮で定置網の漁具被害が2箇統で3千5百万円の被害が出ておりまして、令和6年度は、8月の台風第5号と合わせて急潮被害が出ておりまして、漁具被害、定置網14箇統、養殖施設の損傷が出ておりまして、3億3千万円の被害が出ております。</p> <p>こういった被害に関しては、やはり施設の損害を補償する漁業共済制度の活用が有効ということで、一定の要件を満たした場合、国から一部が補助されるものです。県としては、関係団体と連携しながら、共済制度を活用していきたいと考えております。</p> <p>併せて、こういった被害を未然に防止していくという観点で、県の水産技術センターでは、令和5年度から急潮情報を発出しており、漁業者に対して注意喚起を行っているほか、そういった被害に遭わないような定置網の構造を強化するような、災害に備えた施設の強靱化ということで、国の制度や補助事業を活用した支援等を行っているところです。</p>
<p>坂田 農林水産企画 室企画課長</p>	<p>高橋委員から話のありました新規就業についてですが、水産アカデミーについては、今年から卒業生の交流会を考えておりますし、新規就農に関しては、主に若手の就業者を映像で紹介する、主に女性を考えておりますが、そういう方々の取組を紹介することをYouTube等で考えております。その中で、先ほど四戸委員から話がありました、海業とか、地域の情報発信を強く発信する必要があるということで、その映像の中に、地域の特色や産物の情報発信をしていきたいと考えております。</p>
<p>山崎 義広 委員 (会長)</p>	<p>次に、中村委員から藤岡委員まで席順にお願いしたいと思います。</p>
<p>中村 靖子 委員</p>	<p>私は、消費者の立場で委員に声をかけていただいておりますので、皆さんのように、漁業に専門的な知識があるわけではないですが、今回もやはり、皆さんの話を聞きながら、漁業者の皆さんは本当にたくさんの苦勞と努力をされていると思っております。</p> <p>スーパーで買い物しても、今まで食べられていたサケとかサンマとかがなかなか店頭には並ばなくて、見慣れない魚が並んでいて、でもやっぱり食べ方がわからなくて買うのを躊躇したり、魚種が変わってきているのを感じているところです。その原因が先ほどお話が出ていますけれども、海の気候変動とか地球温暖化というところの原因もあるということですが、私たち消費者として、そこに対してどういった取組、CO2削減とか、節電しようとかそういった思いはありますが、漁業者から何かSOSみたいなものをも</p>

っと発信していただいて、消費者としてできることが何かないかなと、すごく考えさせられながら過ごしております。

今回養殖サーモンの取組についてお話がありましたけれども、県産の水産物を食べたいという思いは素直にありますので、是非この計画どおり進めていただき、店頭でもたくさん手に取れると嬉しいなと思っています。

県産サーモンのロゴもあるようですので、是非そういったところで、PRをうまくしていただいて、消費者に岩手のものだとわかるようにやっていただければ、もっと皆さんが手に取りやすくなるのかなと思います。そして価格面でも、値段が高いため、なかなか手が出せないところですが、そこもうまくクリアしていくと嬉しいかなと思っています。

あと海業の方も私はすごく魅力を感じております。先ほど、四戸委員からも、内陸でもそういう取り組みを一緒にできたらという声がありましたが、私も内陸の人間なので同感です。沿岸に行きたい気持ちはありますけれども、なかなか距離があるところも、参加するのにハードルが高かったりしますので、是非、内陸にいても漁業者の皆さんと関われる、何か体験できるものが進んでいくと嬉しいなと思っています。

藤岡 裕子  
委員

私は、矢巾町の地域おこし協力隊を経て、まちづくりの地域の情報発信をしたり、賑わいづくりをする企画運営をする会社をやっており、今年の4月からは盛岡に新しくできます道の駅渋民の方移りまして、引き続き、まちづくりに取り組んでいこうと思っています。

私自身がやっているその企画運営の部分で、地域産業に関わる人たちと子供たちとの交流を設けたりとか、体験を通じて地域産業に携わるみたいなことを企画することが多いのですが、矢巾町なので、結構、農産物のPRに色々取り組んでいたのですが、本日、海の方のお話を伺ってみても、やはり農業と似ている部分があって、獲れていたものが獲れなくなったりとか、独自性を目指しているとか、PRの部分だったりとか、担い手の部分だったり、課題の部分は本質的に一緒だなと思いながら聞いておりました。

その中で、サーモン養殖について、八幡平でもサーモンを養殖していると思っていますけれども、陸上養殖に取り組んでいる事業者も増えてきているように思っております。矢巾町の中でも陸上養殖に取り組もうとしている若手経営者がいたりとかするので、内陸でも海の話は遠いものっていうものではなくてきたのかなっていうのをすごく肌で感じております。

町内の魚屋に頼んで、未利用魚の捌き方講習会をしてみたり、海の豊かさを内陸でも考えてみるような取組をやったことがありまして、子供たちも一生懸命考えていました。海が近くなくても、やはり岩手にいる者として、すごく海を考えたり魚のことを考えたりとかする機会がすごく有効だったなというのを感じておりましたので、これからも、そういった取り組みを自分でもしていこうと改めて思うきっかけになりました。

海業という言葉も本日も初めて聞いたのですが、何かすごく可能性を感じるようなことだと思いましたので、いろいろと取り組みたいなと思います。海があって、海産物が美味しくて、内陸にいても、美味しい海産物が手に取れてといった、すごく良いところだと思いますので、私も内陸部の人ですけれども、子供たちの将来に残したい岩手の宝物だなと思いますので、何かできることを、この審議会を通して考えていけたらいいなと思います。

山崎 義広  
委員 (会長)

ただいま、委員から出された御意見等につきまして、事務局からコメントがありましたらお願いします。

工藤  
漁港漁村課総  
括課長

委員からお話がありましたとおり、内陸部に向けても海業を発信していかなければならないと感じております。

また、新たな取組みということで、取り組んでいるわけですけれども、先ほど申し上げた既存の取組の中でも海業といえるようなものもございますので、そういったものもお知らせしながら、内陸部からも足を運んでもらえるような工夫をしていきたいと思っております。

藤原  
振興担当課長

中村委員と藤岡委員から、見なれない未利用魚が増えてきて、食べ方がわからないといった御指摘をいただきました。こういった中で、ニュースで小さいタイがいっぱい獲れたというものがありますが、ある日突然たくさん獲れてもなかなか利用に結びついていないという課題がございます。

そういった中で、県内の消費者に馴染みが薄いということがありますので、県内での認知度を高めて単価の向上とか、加工業者と連携した加工原料の活用を図っていく等の取り組みが必要だと考えています。

また、陸上養殖につきましては、県内でも、これまでも様々な取り組みをされているところですが、どうしてもイニシャルコストがかかるという欠点がありますが、一方で、品質が安定するとか、海洋環境に影響されにくいという利点もございますので、引き続き、取り組みを支援していきたいと考えております。

工藤  
沿岸広域振興  
局水産部長

中村委員からお話のありました県産サーモンのPRをしっかりともらいたいという御意見について、こちらは沿岸広域振興局の事業で実施しているものであり、県内の量販店、ジョイス等45店舗でPRを行ったところですが、来年度以降も同じように継続して実施していきたいと考えております。県産サーモンの良さをしっかりPRしていきたいと思っております。

山崎 義広  
委員 (会長)

最後に、リモート出席の委員ですが、濱田 武士委員はいかがですか。

濱田 武士  
委員

サーモン養殖の取組について、かつて、ご当地サーモンレベル、或いは地産地消レベルで県の方も考えていたと思いますが、今日の話ですと、広域流通に向けた体制づくりを支援していくという考えになったと感じたところですが、そうなのか。そうなると、今後、生産拡大としてどこまで増やしていくのかということにもなりますが、漁場の利用についても、かつて魚類養殖は非常に慎重であったところですが、空き漁場も増えてきたということもあろうかと思えますけれど、その辺、ある程度思い切って次の漁業権の更新に向けて、どんどん推進していくのか、或いは、魚類養殖のインフラ、こちらもかつては定置とかワカメ養殖インフラというようなイメージが強かったが、もう1歩踏み込んで、こういう養殖基地化していくのかということで、様子見ながらかと思えますけど、そういうところまで考えが至っているのかどうか教えていただけたらと思います。

サクラマスについては、北海道でもやろうとしていたのですが、正直言って現場がなかなかついてこないということで、サーモン養殖については、サクラマスではなくトラウトの方に流れてしまったという感じで、現状、北海道では、あんまりうまくいっていないと思っています。種苗供給について、今後、岩手県ではできるかとは思いますが、今も釜石でやっておりますけれども、積極的にこのサクラマスをトラウトやギンザケではなく選んでいくっていうような、技術とか、生産拡大していく流通とか、サクラマスをマーケットサイズに育てるのはなかなか難しいとかいうような話も聞いたりするのですが、その辺の研究といいますか、相当頑張っていくことが必要なのかなと思っておりますけれども、その辺、県の方でどういうふうに考えているのか教えていただきたい。

また、公共事業としての藻場造成事業も説明がありましたが、先ほど委員のお話を聞くと、藻場造成の取り組みも非常に盛んに行われていて、いろいろ工夫されている。漁業者サイドの努力も非常に受けていただきましたけれども、せっかくの努力なので、ブルーカーボンクレジットの取組については、本日話がなかったものですから、先ほど農林中金の方から若干ありましたけれども、県としてはどのように考えているのか。なかなか調査費が高くて、事業的に合わないという話を聞いておりますが、一方で高くないというのも聞いております。そういう意味で、県として、ブルーカーボンクレジットをどのように考えているのかお聞かせいただきたい。

最後ですけど、海業の取り組みでございます。交流人口を拡大していくということは、過疎地域で非常に重要な取り組みだと思っております。ただ、国の事業とかを使ってや

っていくとなると、現場の漁協職員がそういうところまで十分に手がまわらないのではないかという心配があります。そういった漁協のマンパワー不足の中で、国の要綱や要領に合わせて十分に対応できるのかといったところがあり、人口拡大はやっていくにしても、そういった予算については、例えば、漁協の青年部で考えている養殖試験とか、或いは女性部活動の魚食普及とか、或いは藻場造成とか、もっと言えばカーボンクレジットの取組など、現実に行おうとしている、これからやろうとしているものに対し、こういった予算を充てていくのが良いのかなと思います。

山崎 義広  
委員 (会長)

袁春紅委員はいかがですか。

袁 春紅  
委員

私は水産物の鮮度保持と加工利用を専門としております。その観点から、少し意見を述べさせていただきます。

先ほども多くの委員からお話がありましたが、近年、海洋環境の変化や高水温の影響により、三陸の水産物の生産量やその構成が大きく変化しています。特に漁獲量の減少が深刻な課題となっており、さまざまな対策や解決策が求められています。例えば、岩手県はもともとワカメの生産量が日本一でしたが、現在では宮城県の方が上回っています。これにより、岩手の水産物の強みをどのように維持し、発展させるかが問われています。

また、ホタテ養殖においても昨年は稚貝の生存率が大幅に低下し、漁師の方々からは「筏で養殖しているホタテの約半数が死んでしまった」という声が聞かれました。こうした状況では、ホタテ養殖を続けること自体が困難になりつつあります。

さらに、アルプス処理水の海洋放出やそれに伴う中国への輸出停止を受け、日本全体としては国内消費の拡大や輸出の多角化を進めています。特に国内消費の拡大に関しては、岩手の水産物をいかに全国へ流通させるかが重要な課題です。冷凍品ではどこで生産されたものでも同じように扱われがちですが、近年の食の高級志向の高まりや、コロナ禍におけるふるさと納税の傾向を考えると、生食の需要が増加していると感じます。実際に殻付きホタテやカキの需要は、ここ数年で3倍以上に伸びています。このような状況を踏まえると、鮮度保持の技術が非常に重要になります。また、運送業界においてはドライバーの労働時間規制の影響で、東京や大阪へ翌日配送が難しくなり、配送に1～2日余計にかかるケースも増えています。そのため、品質を維持し、鮮度を保ちながら輸送できる流通方法の確立が急務です。

私も岩手の水産物の強みを活かした鮮度保持技術や流通改善の研究課題を取り組んでおります。最終的には、漁師の方々を持続的に利益を上げられる仕組みを作ることが重要です。そして、三陸全体の生産量を増やし、水産物の振興につなげていく必要があると考えております。

山崎 義広  
委員 (会長)

ただいま、リモート出席委員から出された御意見等につきまして、事務局からコメントがありましたらお願いします。

藤原  
振興担当課長

濱田委員から御質問のありましたサーモン養殖の取り組みについてですが、まず、どこまで増えるかというところで、なかなか何トンと数字まで示すのは難しいものですが、現状、それぞれの漁協や連携企業の情報を踏まえますと、今年の予測が3千トンですけどもその倍以上にはなるのかなと思います。

そういった中で、サクラマスのお話いただきましたが、サクラマスは、現在、生産量の1割ぐらいで、主に釜石で生産しております。サクラマスに特化するというよりは、ギンザケやトラウトは海外から入ってくるのですが、サクラマスにつきましては、県内でオリジナル種苗をつくることのできるということで、これまでも内水面水産センターで研究してきた経緯もあります。そういった成果も踏まえて種苗の可能性を検討したいというのが今年の事業でございます。今後、サクラマスも含めた全体として、それぞれの魚種の良いところを活かしながら、危険分散も含めて具体的に取り組んでいきたいと考えております。

	<p>袁委員からお話のありました、海洋環境の変化と高水温の関係ですが、まず、ワカメにつきましては先生御指摘のとおり、もともと岩手が一位の生産量でしたが、近年は宮城に負けるというような状況がございます。一方で、ワカメにつきましては、もともと岩手は一番冷たい海で養殖していたということで、高水温になっても、まだまだ増産の可能性があり、期待が大きいものでございます。ワカメの増産については、県漁連と相談しておりますし、水産技術センターの研究として、高水温耐性の種苗開発を令和7年度の事業として予算計上しております。</p> <p>一方、ホタテについては、ワカメと逆で、水温が高いと厳しいところですが、そういった高水温の中でも養殖ができないかということで、高水温マニュアルを水産技術センターで作成中でございます。</p> <p>また、アルプス処理水の影響のお話がありましたが、アワビは国外の方に流れるものが多く、ALPS処理水の影響を受けて単価が厳しい状況です。そういった中で、国内向けの流通拡大ができないかということで、県の事業の方で、国内でアワビを流通させるためにこういったモデルができるかという取組を今年度そして来年度も事業化しております。そういった取組を進めながら、これまでの流通の形態も改めるところは改めて取り組んでいきたいと考えております。</p>
<p>工藤 漁港漁村課総 括課長</p>	<p>濱田委員からお話のありました海業について、漁協のマンパワーもそのとおりだと思いますが、今取組が進んでいるものとして、漁港の静穏域を使ったらウニの蓄養が増えておりますので、こういった取組であれば、進めていけるかなと思っております。</p> <p>一方、事例にもあります直売所とかレストランみたいなものがないと、通年での集客はなかなか難しいという面もございますし、そこは相談しながら、出来るものから順番に取り組んでいくことで考えております。</p>
<p>山崎 義広 委員 (会長)</p>	<p>各委員からのコメントに対する回答がされましたが、その他、委員の皆様から、何かございますでしょうか。</p>
<p>山崎 義広 委員 (会長)</p>	<p>それでは、他に発言がないようですので、最後に私の方から一言申し上げます。</p> <p>皆さんご承知のとおり、今、浜が大変な状態にあります。その中で、話の出ました水産業リボーン宣言の取組、サーモン養殖や海業について、部分的には確実に取組が進められておりますので、皆さんには引き続き、そのような浜の状況をご理解の上、なお一層の御協力、御支援をお願いしたいと思います。</p> <p>それでは、以上をもちまして、第64回岩手県水産審議会の議事を終了いたします。議事進行への御協力、誠にありがとうございました。</p>
<p>平嶋 特命課長 (進行)</p>	<p>山崎会長、ありがとうございました。最後に、岩手県農林水産部水産担当技監の森山拓也より、委員の皆様へ、一言御礼の挨拶を述べさせていただきます。</p>
<p><b>閉会挨拶</b></p>	
<p>森山 水産担当技監</p>	<p>閉会にあたりまして、山崎会長をはじめ、委員の皆様方には、本県の水産施策に関する貴重な御提言をいただいたところであり、改めて、感謝を申し上げます。</p> <p>県といたしましては、引き続き、水産関係団体と一体となって、水産業の振興に向けて取り組んで参りますので、今後とも御支援くださいますよう、よろしく御願い申し上げます。</p>
<p>平嶋 特命課長 (進行)</p>	<p>これをもちまして、第64回岩手県水産審議会を閉会いたします。本日は誠にありがとうございました。</p>
<p><b>閉会</b></p>	